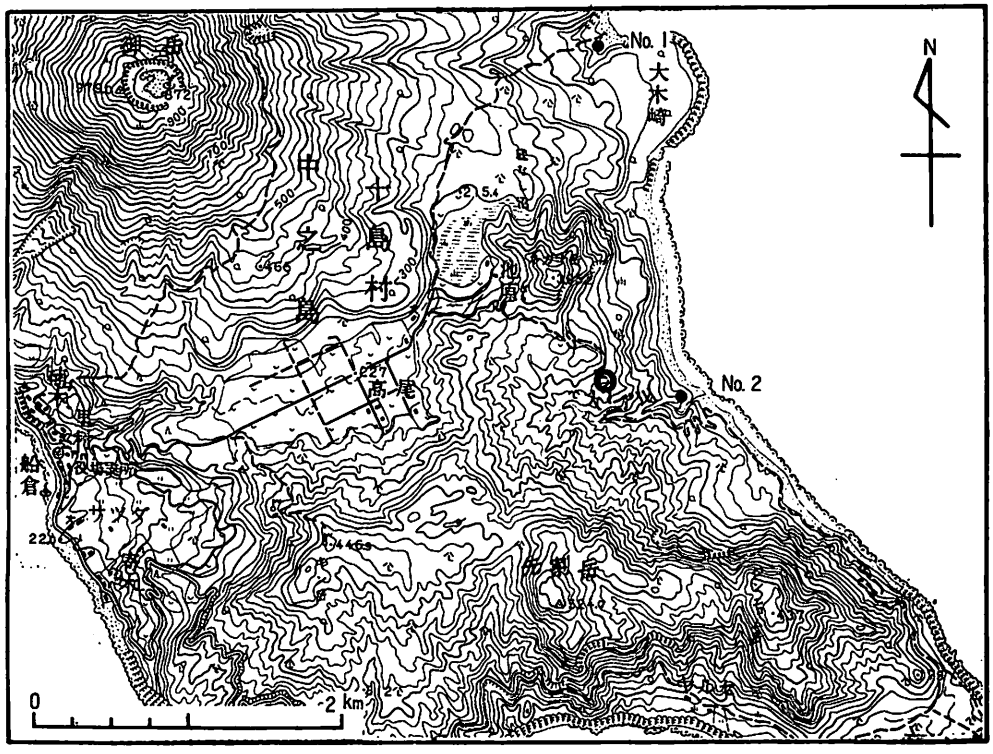
一　調査の概要

タチバナ遺跡は吐噶喇列島中之島の東海岸七ツ浜を見下す位置にある。[註] 七ツ浜は急峻な崖に囲まれた三日月形の海岸で、幅100m に近い裾礁が南北3.5kmにわたって拡がっている。比較的生活に便宜であったらしく、No.1とNo.2に近世集落の址がある（第１図）。

しかし遺跡はこの海岸から距離約500m 、標高165m の付近にあり、幾つかの谷を迂回し、崖をよじ登らねばならず、その接近は必ずしも容易でない。むしろ海に依存することの困難な立地条件にあると言える。

発掘地点付近は湧水を囲む緩傾斜地に当り、囲りに馬蹄形の稜線が連なり、台風の被害の少ないところである。この緩傾斜地の範囲内から滑石製石鍋の破片、須恵器類似の硬陶片などが発見されているので、中世の居住選定条件と似た集落の選定条件をタチバナの遺跡人達が持っていたことになろう。

註　熊本大学法文学部考古学研究室「タチバナ遺跡」研究活動報告4.1979



第１図　タチバナ遺跡位置図（○はタチバナ遺跡　●は近世集落址）（１／50000）

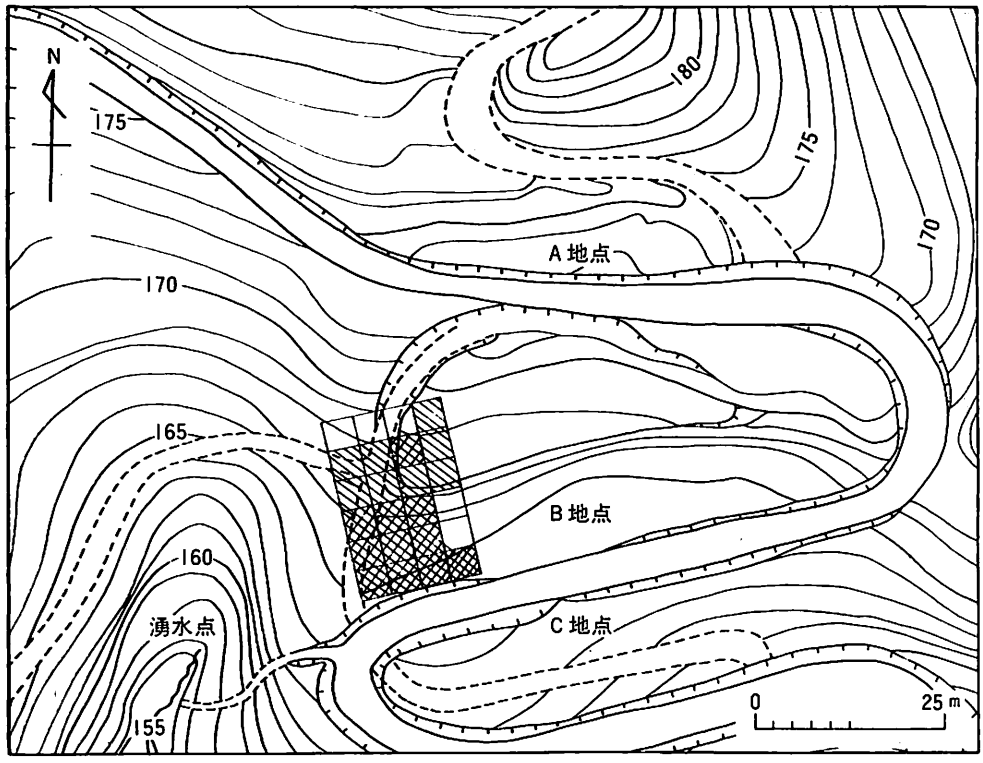
タチバナ遺跡は1977年７月・1978年７月の２回の発掘調査に次ぎ、今回で３回目の発掘調査である。

前回の二度にわたる調査によってタチバナ遺跡は縄文晩期相当の円形竪穴住居址群であり、また周辺地域の土器が混在する遺跡であることが明らかになった。今回は出土遺物の増加と住居址の分布状況の把握をめざしておこなった。

発掘調査は1979年７月３日から７月13日までの10日間おこなわれた。発掘区域はＢ地点の第一・二次の調査グリッドの北側にそって４×４ｍの９グリッド（Ｂ24・31～34・41・43・44・51区）、第二次発掘調査区との重複区を含め（Ｂ３・22・23・42区）の合計13グリッドでおこなわれた（第２図）。Ｂ10・20・30各列のグリッドは予想より埋没位置が深く、Ｂ31グリッドの完掘はできなかった（第２図）。

今回確認された遺構は未完掘の31グリッドの３基を含め、円形竪穴住居址９基、初めて検出された隅丸方形竪穴住居址３基、土壙６基、炉址７基であった。

（中村）



第２図　タチバナ遺跡地形測量図
（交斜線部は第一・第二次発掘調査区　右斜線部は今回の発掘調査区）（１／1000）

二　層　　序

遺跡の立地する七ツ山付近は厚さ２～３ｍの黄褐色の火山噴出物におおわれている。その下半は霞爛した鶏卵大のパミスを主成分とするが、上半は粒子が細かく、通常の火山灰堆積層に近い。最上層は厚さ0.1～0.4ｍの腐植土である。

遺構は複雑に重複し合いながらこのパミスの霞爛層まで掘り下げて形成されているため、遺跡内の層序は、全体としてひとつの傾向を持ちながら、各部分において著しく錯綜した状況を呈している。これを観察の比較的容易であったＬ.Ｓ.13の断面図で例示すると次のようである（第３図、図版５）。

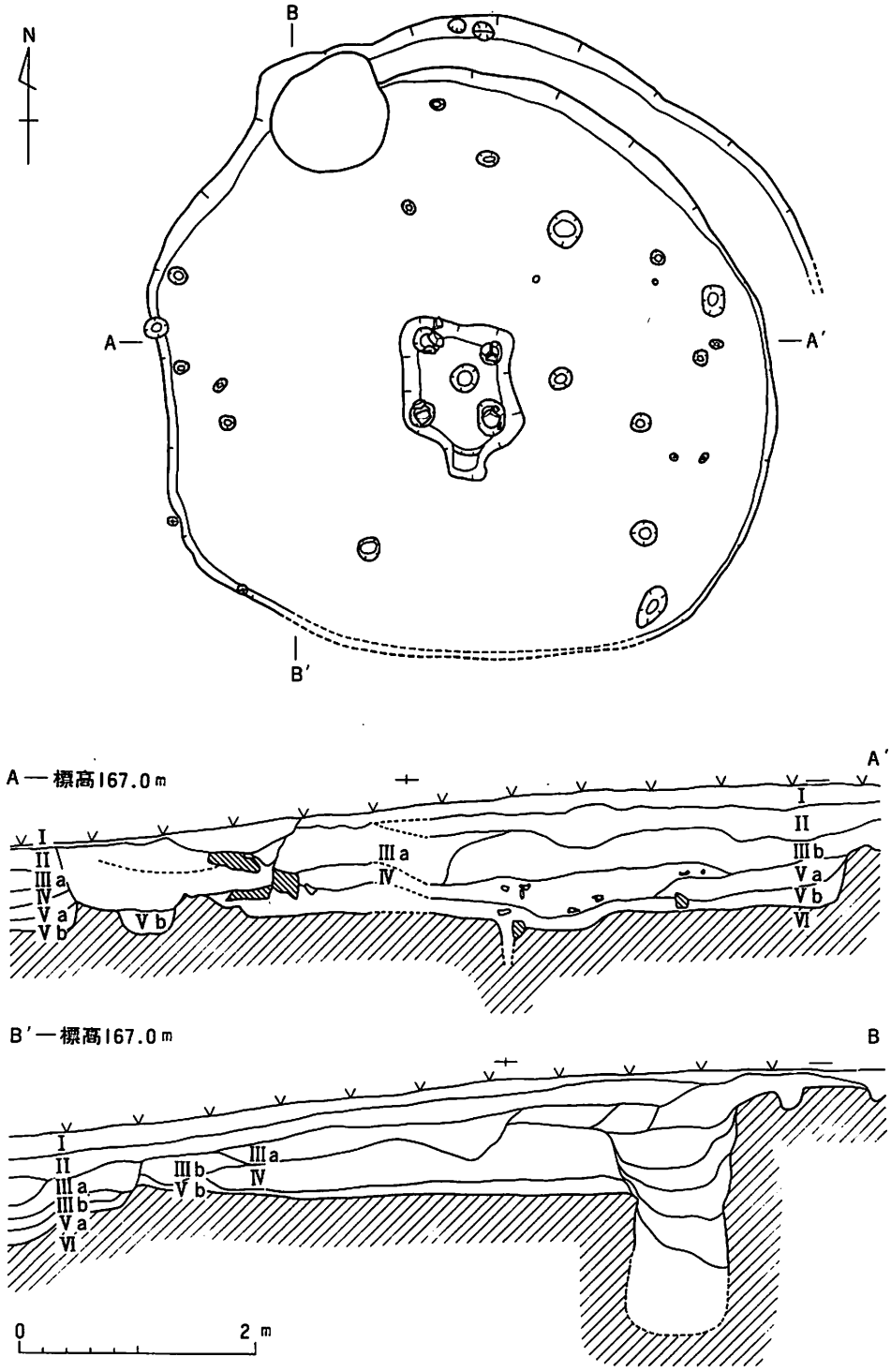
Ⅰ層　厚さ約10～40cmの黒色を呈する腐植土層（表土）である。

Ⅱ層　今回新たに確認された層で、厚さ約10～30cmの暗黄褐色を呈する攪乱層である。少量の土器片・木炭粒を含んでいる。この層は、一段低い位置に当る昨年度までの調査区には及んでいない。

Ⅲ層　前回までに確認されたⅡ層にあたり、厚さ約10～40cmの暗褐色を呈する土層である。比較的柔かい層（Ⅲ*a*層）と固くしまった層（Ⅲ*b*層）に分けられる。両者ともにパミス・木炭粒を少量含む。前者は一部が攪乱を受けてやや粘性があり、発掘区西側では確認されなかった。後者は住居址が埋まった後に形成された土層である。粘性がやや強く、その後の攪乱は受けていない。両者ともに出土土器は小片で量も少ない。

Ⅳ層　厚さ10～35cmの黒褐色土で粘性が強く固い。住居址内にレンズ状に堆積した層で、いわゆる住居址の覆土である。鶏卵大のパミス・木炭粒を多量に含んでいる。Ｌ.Ｓ.18内の西側でⅢ層の直下にＬ.Ｆ.15が検出された。また、Ｌ.Ｓ.13内の北側のピットはこの層の最上部から黄色パミス層まで深く掘り込んでいる。土器・石器ともにこの層から最も多く出土していて、大形の土器片も多く見られる。

Ⅴ層　厚さ約５～35cmのにぶい黄褐色土で、住居が放棄された後に最初に形成された層である。前年度のⅣ層に対応する。上部層（Ⅴ*a*層）と下部層（Ⅴ*b*



Ⅰ　黒色土（表土）
Ⅱ　暗黄褐色土
Ⅲa 暗褐色土（柔かい）
Ⅲb 暗褐色土（しまっている）
Ⅳ　黒褐色土
Ⅴa 黄褐色土（やや暗い）
Ⅴb 黄褐色土
Ⅵ　明黄褐色土（地山）

第３図　L. S. 13平面・断面実測図

層）に分けられ、前者は後者よりやや暗い色を呈している。両者ともに粘性が強く、鶏卵大のパミス・木炭粒をやや多く含み、固くしまっている。後者は主として立ち上がり付近に堆積している。出土遺物はⅣ層より少ないが、大形の土器片が多く、住居址内に放棄されたものである。

Ⅵ層　鶏卵大のパミスを特に多量に含み、明黄褐色を呈する地山である。

（柳原・米倉）

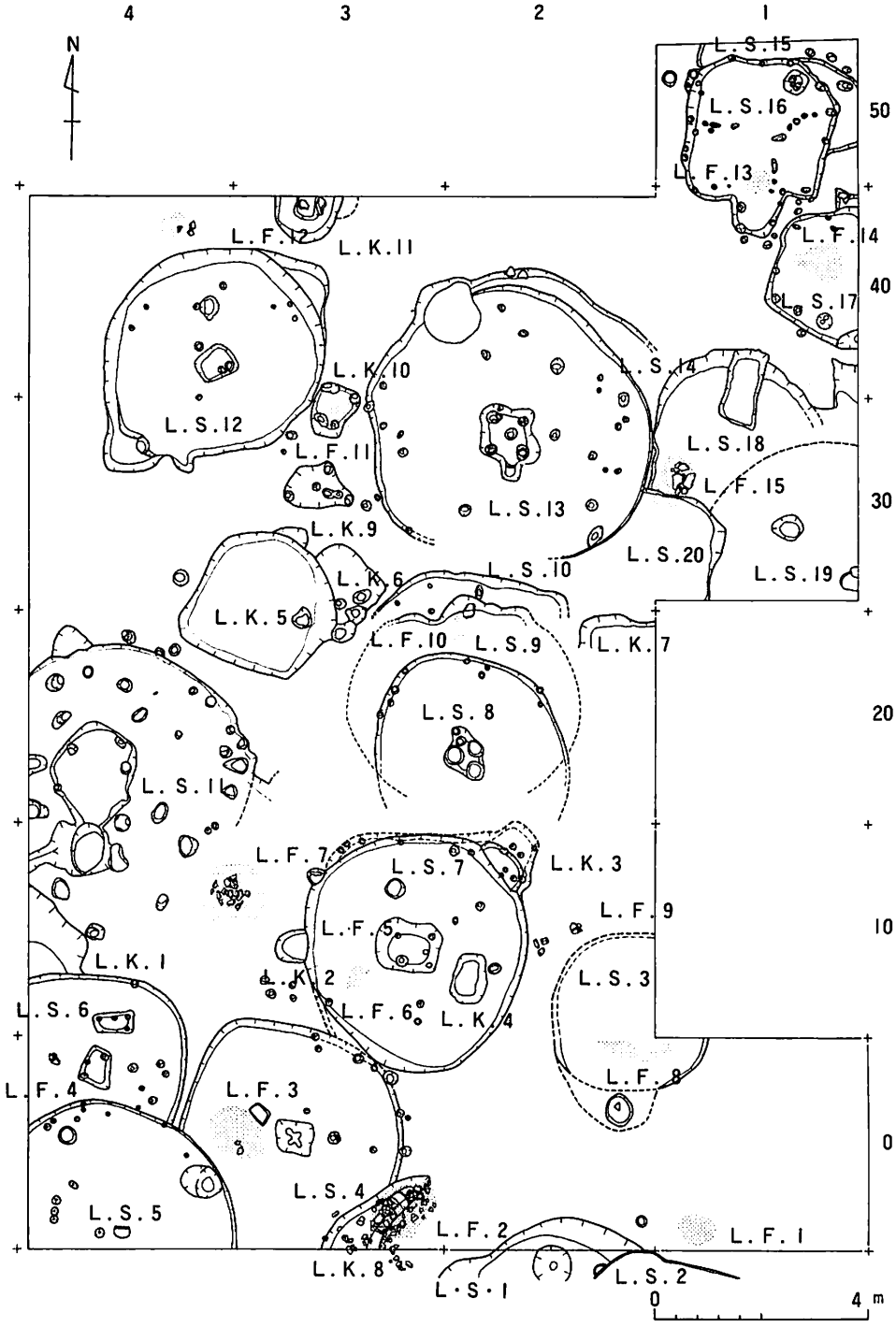
三　遺　　構

第３次調査では前回の調査区域（Ｂ１～４・12～14・22・23区）の一部（Ｂ３・22・23区）と24区、その北側のＢ31～34・41～44・51区を調査した。前回までの調査によって、Ｌ.Ｓ.（竪穴住居址）８基、Ｌ.Ｆ.（炉址）９基、Ｌ.Ｋ.（土壙）８基を確認したが、今回新たにＬ.Ｓ.12基、Ｌ.Ｆ.７基、Ｌ.Ｋ.６基を検出した。遺跡が南向きの緩斜面に立地し、さらに階段状に耕作されているため全体的に住居址の南側壁面が低いものや削平されたものが多い。

Ｌ.Ｓ.12基のうち９基は円形竪穴、３基が隅丸方形の竪穴で、後者は今回初めて検出された。隅丸方形の竪穴は１辺2.5～３ｍで、長径約３～５ｍの円形竪穴に比べると小形である（第４図、図版１下）。

Ｌ.Ｓ.８は前回の調査では南半分が削平されていて輪郭が不明瞭であったが、北側部分の発掘によって中央に大形ピットを有する円形竪穴であることが判明した。大形ピットは四隅に小ピットをもち、各小ピットの中から角礫が検出された。このような大形ピットは他の住居址でも確認された。一般に大形ピットは10cm前後と浅く、四隅や中央部の小ピットは30～50cmと深い。小ピット内の拳大の５～６個の礫は底面にでなく柱穴の支え石のようにピットの壁に沿って出土している。また、Ｌ.Ｓ.８の内壁に沿って小ピットが検出された。Ⅰ類土器・Ⅱ類土器が出土している。

Ｌ.Ｓ.９は大部分が削平されていて北側に輪郭を僅かに残すのみである。前回の所見と合わせ、Ｌ.Ｓ.８の埋没後に造られたものと判定された。



第4図　遺構分布図

L.S.（竪穴住居址）　L.K.（土壙）　L.F.（炉址）

L.S.10はL.S.9同様、北側に僅かに遺構の輪郭を認めうるのみである。

L.S.11は中央に大形ピットを有する円形竪穴であるが南半分を削平されている。中央の大形ピットはやはり四隅に小ピットをもつ。大形ピットの南側に別のピットが認められた。また、住居址の内壁に沿って小形のピット、床面に比較的大きなピットが数多く検出された。大形ピット内からⅡ類土器、覆土からⅡ類土器・Ⅳ類土器・磨石（39・43）・石皿（48）が出土した。また、東側にL.S.11と直交するような掘り込みが検出され、L.F.7を伴う住居址と推定されたが確認できなかった。

L.S.12は長径約4mのやや角張った円形竪穴で、中央に方形の大形ピット、内壁に沿って小ピットが確認できた。方形ピットの底面に角礫や石皿が認められた。また、覆土内よりⅠ類土器（5）・Ⅱ類土器（28）・Ⅳ類土器（27・33）磨石（40）が出土した。

L.S.13は長径約5m、深さ北側約0.5m、南側約0.2mの円形竪穴で中央に大形ピットを有する。大形ピットは浅く、内壁の四隅と中央部に小ピットをもつ。中央のピットを除く各ピット内に5～6個の角礫や磨石が認められた。角礫は拳大で焼けた面をもつものがあった。住居址北側に床面を1m以上掘り込んだ土壙が認められたが、これはⅣ層上面より掘り込まれており、後世のものと推定された。中央大形ピット内からⅠ類土器（3）・Ⅱ類土器（9）・Ⅲ類土器(19)・Ⅳ類土器（26)、床面からⅠ類土器（2）・Ⅱ類土器（7）・Ⅲ類土器（14・15・17・18)、覆土からⅠ類土器（1・4・6）・Ⅱ類土器（10・11）・Ⅲ類土器（16・20）・磨製石斧（36・37）・石皿が出土した。

L.S.14はL.S.13に切られている円形竪穴である。掘り込み面が削平されていないため本来の住居址壁面の肩を残していると思われる。その高さは約0.5mである。

L.S.15は隅丸方形の竪穴と推定されたが、遺構の輪郭が発掘区外へ延びているため確認はできなかった。

L.S.16は張り出し部をもつ隅丸方形の竪穴で内部に1基の炉址(L.F.13)

を確認した。また、住居址の中心方向に傾斜した10数個の小ピットが壁面から検出された。L.S.15との新旧関係は確認できなかった。覆土内からⅡ類土器Ⅲ類土器（35）・Ⅳ類土器（25）・磨石が出土した。

L.S.17は隅丸方形の竪穴で1基の炉址を有するが東半分は未発掘である。L.S.16と同様に住居址の中心方向に傾斜した小ピットが壁面に認められた。覆土からⅡ類土器・Ⅲ類土器が出土した。

L.S.18はL.S.19・L.S.20によって切られた円形竪穴で未完掘である。住居址北側の方形土壙はⅡ層からの掘り込みで後世のものと推定できた。覆土からⅠ類土器（30）・Ⅱ類土器・Ⅲ類土器・磨石・磨製石斧が出土した。

L.S.19は未完掘で遺構の存在を確認しただけであるが、L.S.18を切り、L.S.20に切られた円形竪穴と推定できた。また、住居址内の土壙はⅡ層から掘り込んだ後世のものと推定できた。

L.S.20は円形竪穴であるが未完掘である。L.S.19を切り、L.S.13に切られている。覆土内からⅠ類土器・磨石・磨製石斧が出土した。これらの住居址の新旧関係はL.S.18・L.S.19・L.S.20・L.S.13の順に古いと推定された。

住居址内の炉址とは別に、住居址との関係が不明確な炉址を5基確認した。炉址は大きく2つに分けられる。1つは焼土の上面に角礫の石組みを有するものである。

L.F.7は径約0.8m、厚さ約0.13mの皿状の凹みに堆積した焼土の上面に多くの焼けた角礫が検出された。石組みは扁平な礫を用い、9個体に割れた礫を中心として円形に敷いた状態であるが斜立のものも認められた。

L.F.12は径約0.6m、厚さ約0.15mの円形の焼土でその上面に4個の焼けた角礫が認められた。

L.F.18はL.S.18廃棄後に形成されたもので、径約0.5m、厚さ約0.05mの楕円形の焼土とその上面に焼けた角礫が検出された。L.F.7と同様に扁平な礫を用い、割れた礫も認められた。

もう一つは焼土だけの炉址である。L.F.10はL.S.9の、L.F.11はL.K.9の覆土上に焼土が検出された。

また、 土壙が6基確認できた。

L.K.5は1辺約2.5mの比較的大きな方形のもので、覆土内からⅠ類土器(29)・Ⅳ類土器(32)・Ⅵ類土器(34)が出土した。

L.K.6はL.K.5に切られており、B23区北側断面でL.K.6の方が古いことが確認された。

L.K.8はL.S.4・L.F.2の下層から検出されたが、その性格は確認できなかった。

L.K.9は三隅と中央部に小ピットをもち、その形態は住居址内で認められる大形ピットに類似している。また、覆土中に径約2mの円形にL.K.9を囲む礫群が認められた。こうした礫群の出土状況はL.S.8・L.S.13の大形ピットに伴う覆土でもみられ、住居址の埋没過程で廃棄された礫で形成されたものと推定される。その形態と出土状況から、L.K.9は住居址に伴う大形ピットであったと推定された。

L.K.10は内壁四隅に小ピットをもち、L.K.9と同じく住居址に伴う大形ピットであったと推定された。

L.K.11は北半分が未発掘であるが中央にピットが認められ、ピット内から角礫が検出された。

当遺跡の住居址は円形竪穴とやや小形の隅丸方形竪穴によって構成されている。現在までに南島において確認された住居址は全て方形の石組み住居址である。[註] 当遺跡の円形・隅丸方形竪穴住居址は、南島における竪穴住居址の初見例といえる。また、出土遺物から円形竪穴と隅丸方形竪穴に殆んど時期差はなく、ともに縄文時代晩期に属するものと推定された。円形竪穴に認められた小ピットを伴う大形ピットは他に例をみないものであり、類例の増加をまちたい。

註　九学会連合奄美大島共同調査委員会「奄美—自然と文化—」日本学術振興会

(永田)

四　出　土　遺　物

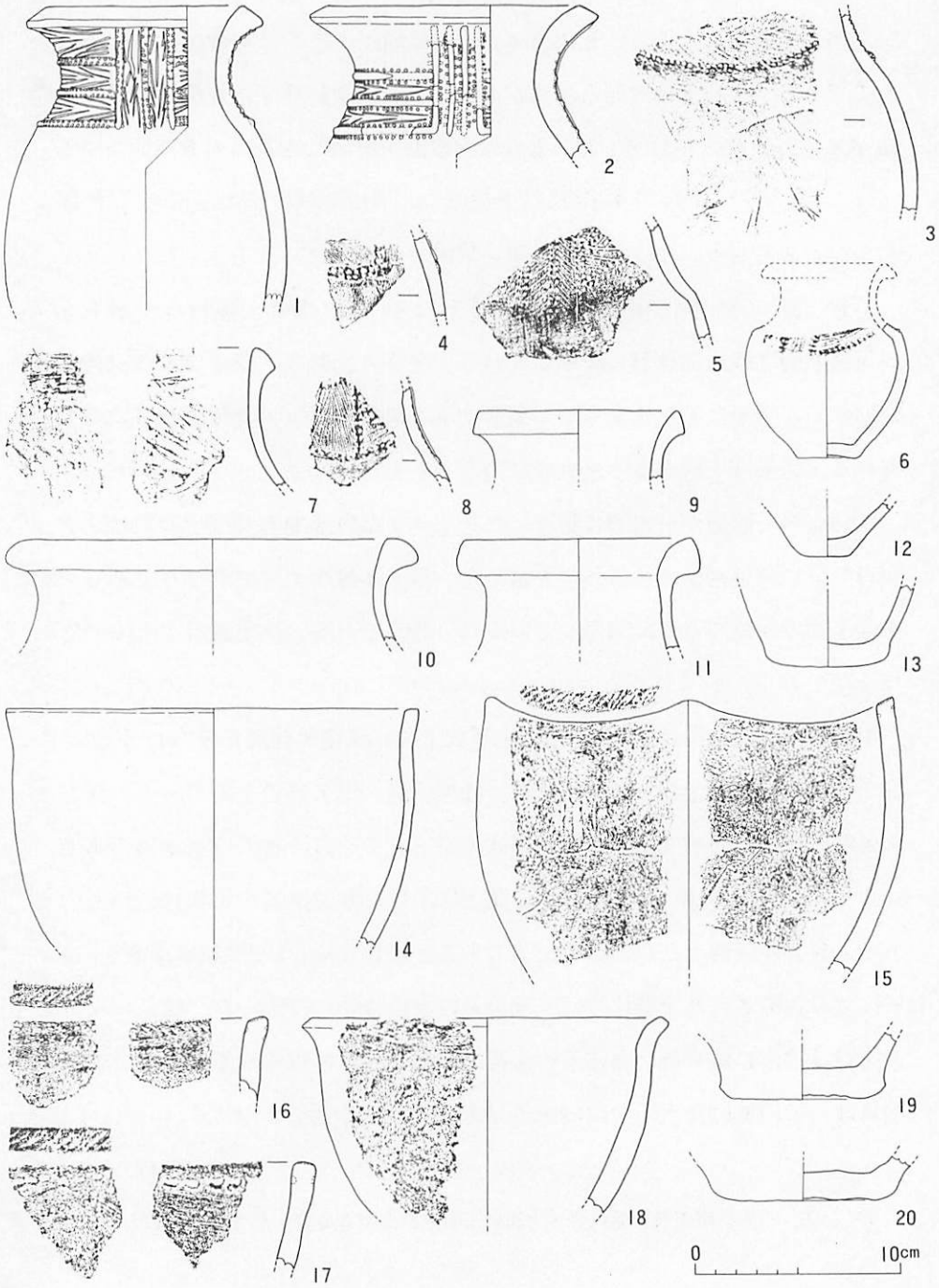
1．土器（第5・6図）

出土土器は器形、文様、胎土などの相異から、次の7類に分類することができる。

Ⅰ類（1～6.8.29.30）口縁部から頸部にかけて文様をもつ胴部の張った細長い丸底の壺形土器である。文様の基本構成は、口縁部の直下から胴部の上半にかけて、細い粘土紐を縦と横に組み合わせて貼付し、その両側もしくはその上に叉状の施文具による刺突連点文を施す。またその凸帯の間を羽状文に類似する細い沈線文で充填してある。沈線をもたないものや、凸帯を細沈線に変えて表現したもの（5）など、移行形式と思われるものもある。また、特殊なものとしては、30のように縦位の凸帯の下に刻みを入れた粘土瘤を付けるものや、6のように肩に稜をもち、底部が僅かにあげ底状を呈する小形土器などがある。全体的につくりが丁寧で、ナデや、1・2のようにヘラ状工具による磨研がおこなわれている。胎土はⅡ類と同じ砂質のものが多いが、中には泥質のものもある（1・2）。後者は器壁が滑沢を有し、0.5mm程度の白色の混和材を多量に含む。前者は焼成もあまく、脆弱な感じを受ける。

Ⅱ類（7.9～12.28）無文の丸底の壺形土器で、胎土・焼成・器面調整法はⅠ類の砂質土器とほぼ同じである。口縁部断面は三角形もしくは蒲鉾形を呈する。Ⅰ類に比べて大形のものが多く、頸部は短く、胴部が大きく張りだす。混和材を用いていない。出土総数は、出土量の略半数を占める。

Ⅲ類（14～20.35）口縁部がやや内湾し、胴部の張った平底の甕形土器である。器壁は1cm前後で厚い。有文と無文のものがあり、前者の文様は口唇部及び口縁部に限られる。山形口縁と平口縁の二種に大別でき、無文のものは平口縁に多いようである。口唇部には細沈線文や貝殻腹縁部による押圧文、口縁部近くには一条もしくは二条の連点文が施されている。器面は全体的に粗いナデによって調整されているが、中には丁寧な仕上げを施したものもある。胎土中に雲母（黄）を多量に含むのが特徴である。19・20はその底部である。



第５図　土器実測図(1)

1・4・6・8・10～13・16・20；L.S.13Ⅳ層，2・7・14・15・17・18；L.S.13Ⅴ層
3・9・19；L.S.13中央大形ピット内，5；L.S.12Ⅳ層　（1／3.5）

Ⅳ類（22～24・26・27・31～33）算盤玉形の胴部に強く外反する口縁部をもつ黒色の磨研土器である。九州の縄文時代晩期の土器が、本遺跡に搬入されたものであろう。器形は浅鉢と深鉢がある。器形は深鉢形で、外器面には貝殻条痕がみられるもの(31)や、33のように内器面を磨研したものもある。

Ⅳ′類（25）Ⅳ類の製作技法を模倣し、周辺地域の粘土を用いて製作したものと思われる。胎土はⅠ・Ⅲ類に酷似している。

Ⅴ類（21）全体に小形であり、器形は甕形や浅鉢・壺形などがある。口縁部断面はほぼ蒲鉾形に肥厚している。泥質の土器で、器壁は1cm前後で比較的厚く、灰赤色の胎土をもつ。甕形土器の胴部にはススの付着しているものがある。底部は平底が多く、丸底状のものもある。

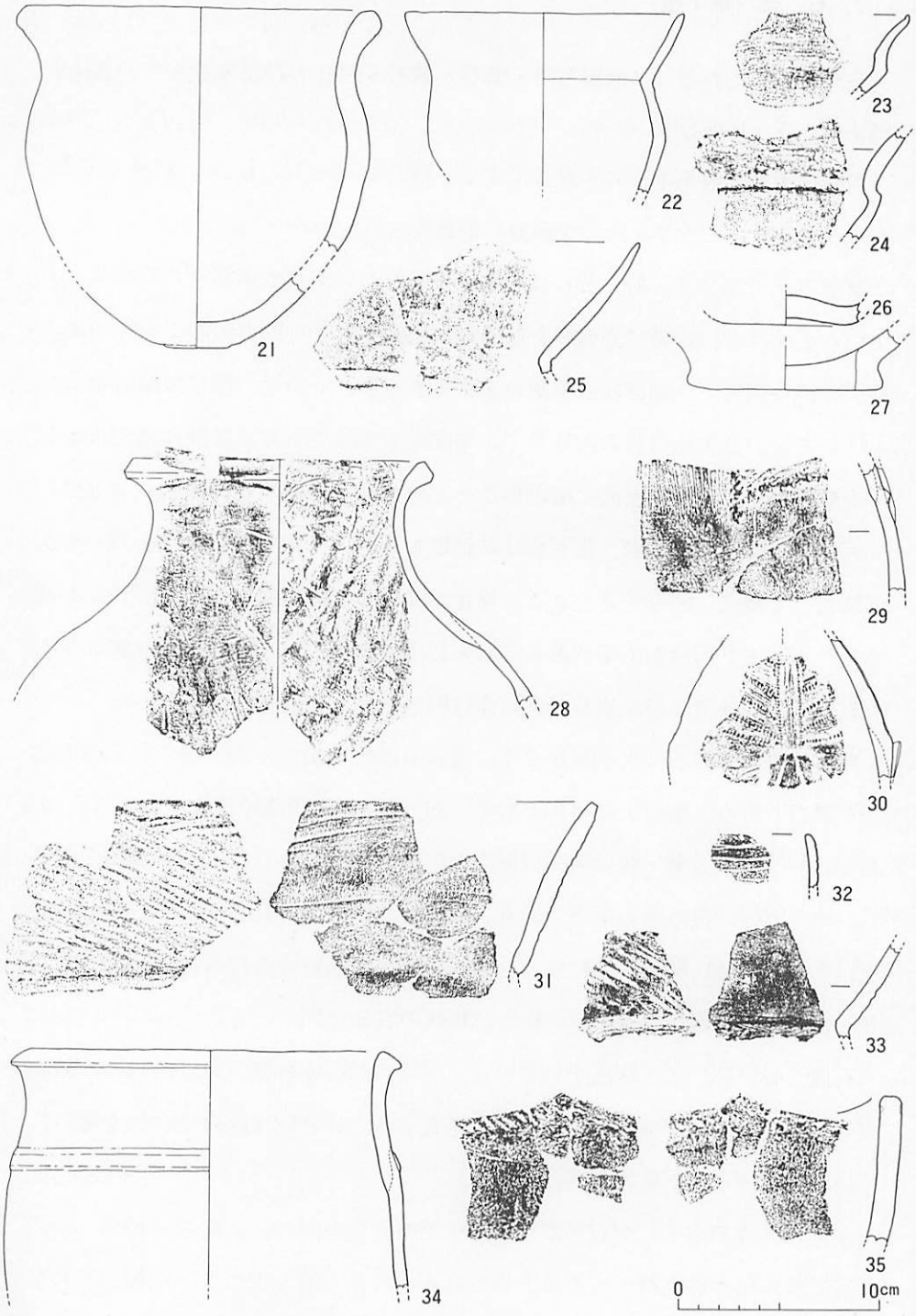
Ⅵ類（34）断面が三角形に肥厚したシャープな口縁をもつ甕形の土器で、肩の部分に薄い幅広の貼付凸帯を巡らす。器面は雑なナデで調整してある。胎土はⅠ類の泥質のものに類似しているが、脆弱である。出土数も少なく、底部は不明である。

Ⅰ類（喜念式土器）・Ⅱ類（宇宿上層式土器）は奄美諸島にみられる土器である、Ⅲ類の有文土器（一湊式土器）は種子島・屋久島の土器である。Ⅳ類は黒色磨研土器で、無文のものは黒川式土器、有文のものは入佐式土器[註]である。

Ⅳ′類の形はⅣ類に似ていて、胎土はⅠ類の泥質土器やⅢ類に近いものである。Ⅳ類を模倣した島嶼系の土器であると思われる。L.S.13床面直上（第Ⅴ層）より採取された土器片では、奄美系の土器は壺形に限られ、種子・屋久系の土器は甕形に限られ、九州系の土器は深鉢・浅鉢に限られている。この対応関係は、この遺跡全土器の傾向を示しているように見受けられる。

（中村・小畑）

註、　加世田市教育委員会「上加世田遺跡発掘調査概要」第五次　1972年



第６図　土器実測図(2)

21～23・24・31；L.S.13Ⅳ層，26；L.S.13Ⅴ層中央大形ピット内，27・28・33；L.S.12Ⅳ層
25・35；L.S.16Ⅳ層，30；L.S.18Ⅳ層，29・32・34；L.K.５Ⅳ層　（1／3.5）

2. 石　器（第7図）

今回出土した石器には磨製石斧・磨石・敲石・凹石・石皿等があり、表採資料を含めると100余点になる。

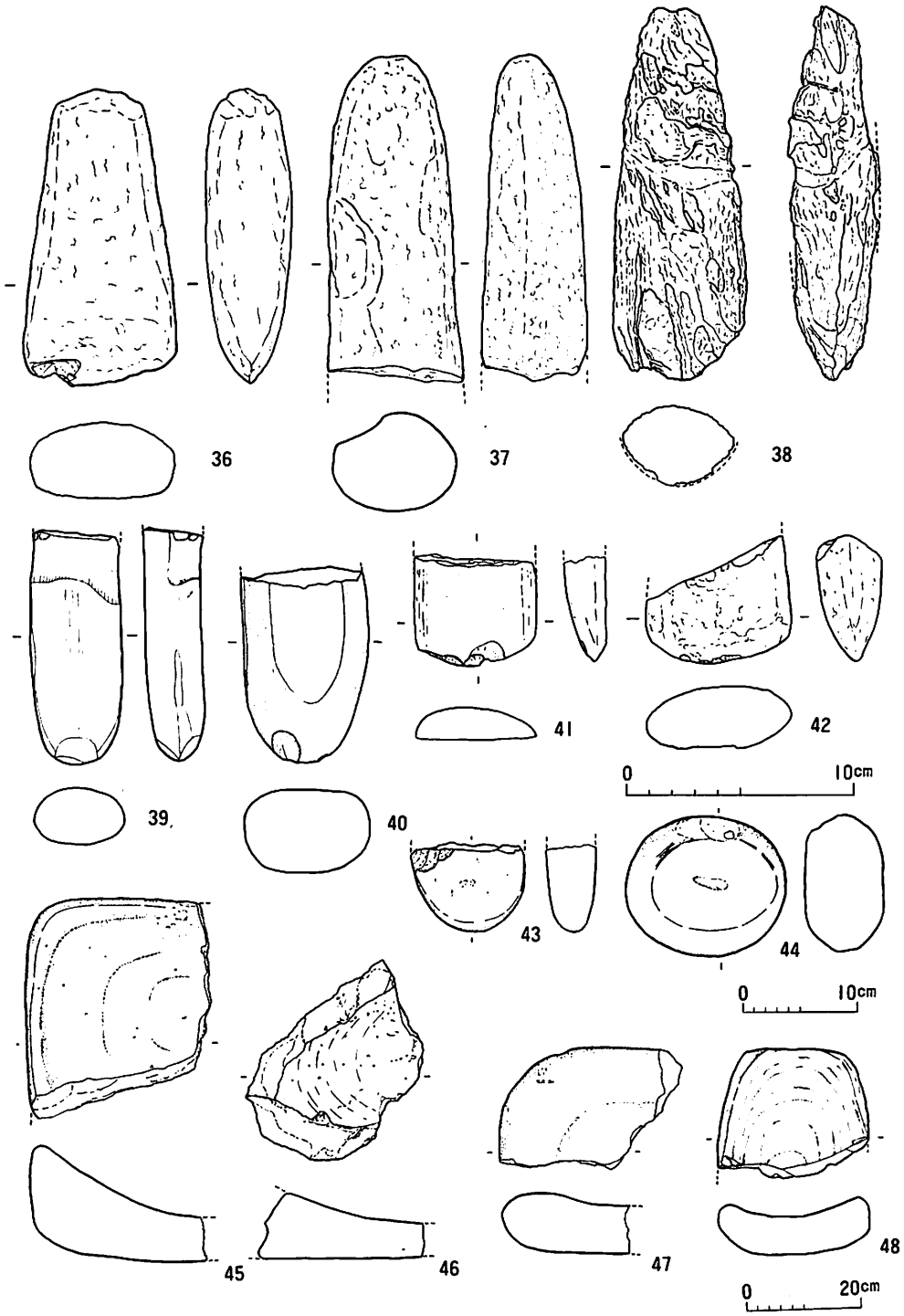
石器は住居址覆土中から多量に出土し、特にＬ.Ｓ.11、Ｌ.Ｓ.13そしてＬ.Ｓ.18に多く、この３ヶ所で全個数の半数を占める。

磨製石斧（36～38・41・42）は７個出土した。いずれも表面がかなり風化している。36は安山岩製で長台形を呈する。基部断面は方形で胴部で丸味を増す。直刃に近い両刃で、頭部は打彫面のままであるが、その他の面には敲打痕が残っている。37は安山岩製の円筒斧で、刃部を欠失している。断面は楕円形を呈す大形の石斧である。全面に敲打痕をとどめている。38は乳棒状石斧に近似しており、横断面は楕円形、縦断面は紡錘形を呈し、両刃である。片面のやや上部において横位に凹みがみられる。風化がはげしく敲打痕はごくわずかしか認められず、また石材も不明である。41と42は基部を欠失している。前者は安山岩製である。後者は凝灰岩製で、断面楕円形を呈し、両刃である。

磨石・敲石・凹石は出土量が多く、全石器の約９割を占めていて、その大部分が磨石である。磨石には棒状のもの（39・40）と扁平形のもの（43・44）がある。39は凝灰岩製・40は安山岩製で全面に研磨がみられ、43・44は安山岩製で、その周縁は自然面のままである。粘板岩を用いた磨石２個が出土しているが、その石材は吐噶喇列島になく、種子・屋久方面からの持ち込みと考えられる。この他、石鋸状を呈する頁岩製の板状の石器２個がある。

石皿（45～48）は５個出土している。全て角閃石安岩製であり、47は比較的大形の円礫を用いており、浅い磨耗面を有する。45と48は隅の丸い礫を用い、深い凹面に使用痕が顕著に残っている。

今回の調査で出土した石器は、前回までの調査と同じく、磨石・敲石・凹石・石皿等の植物性食料の加工具と思われるものが大勢を占めた。粘板岩製の磨石は薩南諸島とのつながりを考える上で重要である。石鋸状石器については今少し類例の増加をまちたい。　（吉永）



第７図　石器実測図

36･37･48；L.S.13Ⅳ層，38；B23区　Ⅳ層，39･43；L.S.11Ⅳ層，40；L.S.12Ⅳ層
41；L.S.18Ⅳ層，42；B32区表土，44；B12～22区セクションベルト，45～47；
B地点表採（36～42は 1／3　43～46は 1／6　47･48は 1／12）

五　ま　と　め

タチバナ遺跡は縄文晩期相当の竪穴住居址群を主体とするものである。その遺構や出土遺物につき、特に問題になるのは次の4点である。

ひとつは土器編年についてである。この遺跡では喜念式・宇宿上層式・一湊式・黒川式・入佐式が混在してみられ、中でも前3者が目立つ。またL.S.13ではこの前3者に黒川式が共伴していた。以上のことは宇宿上層式が縄文晩期に盛行することと、一湊式が形式の崩れをみせながらもこの時期まで存続したことを示している。入佐式はこの遺跡の上限を示すものであろうか。

次に出土した7種の土器はⅠ類（喜念式）・Ⅱ類（宇宿上層式）の奄美系土器、有文のⅢ類（一湊式）の薩南系土器、Ⅳ～Ⅳ′類（黒川式）の九州系土器の3系統に区別できる。全般的に奄美系土器＝壺・薩南系土器＝甕・九州系土器＝深・浅鉢という対応関係がみられ、しかもL.S.13の床面ではこの3種が共伴していた。このような共伴関係が他の遺跡でも認められるのかどうか、今後の課題であろう。

その次は石器の組成についてである。タチバナ遺跡出土の石器は磨石・敲石・凹石・石皿などの植物質加工具が大半を占める。これは奄美・沖縄諸島のこの時期に一般的にみとめられる現象である。南九州でも同様な石器組成はみられるが、それ以外に打製石斧・石鏃・岩偶などの出土が知られている。土器や後述の住居の形には九州的要素がみられるが、石器の組成が奄美・沖縄諸島寄りであるのは生業活動の相異によるものでもあろうか。

四つめは住居址についてである。南西諸島の既見の住居址は宇宿貝塚・住吉貝塚などの方形の石組み住居址である。タチバナの円形竪穴住居址は今のところ九州からの影響を考える以外にない。しかし円形竪穴に伴う大形中央ピットは類例がない。

以上のようにタチバナ遺跡は九州的要素と島嶼的要素のことのほかの混合を示している。今後、諸要素の細分とその地域的な拡散状況を把握し、周辺諸遺跡との関連を明確にしていきたい。　（中村）